

「オネエ所長の調査ファイル」# 15

山崎浩治

1

「手作りの本命チョコをどうぞ、トオルちゃん。豪華特典もあるのよ」

「いまひとつ喜べないプレゼントですが、ちなみに豪華特典って何です？」

「あたしのキスマーク付きメッセージカード！」

「いりませんよ、そんなもん！」

「そういえばさ、女子力に自信の持てない女性を `こじらせ女子、` って言うんでしょ？ あたしなんて、まさに `こじらせ女子、` じゃない？」

「所長は何かを致命的にこじらせてるとは思いますけどね」

「だからあたし、これからもっと自分に正直に生きることにしたの」

「すでに十分過ぎるほど正直に生きてるでしょ！」

「トオルちゃん、あたしを抱いて。ううん、抱け！ 抱きなさい！……ってこれ、セクハラかなあ」

「立派な脅迫罪です！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が平日の昼、オフィス街で張り込みをしている。半月ほど前、とある企業の金沢支社に「支社長からセクハラを受けた。その事実を裁判で訴え、マスコミに公表する」という内容の匿名の投書が届く。人事部長の真由美(45歳)から「投書の差出人を突き止め、セクハラの有無を調べてほしい」と依頼を受け、調査に赴いたのだ。この日の市山はタートルのニットワンピースにキャメルの子供服を羽織り、オフィスカジュアルを意識した女装をしている。昼休みに社外に出てくる女性社員から情報を仕入れるための配慮らしい。

調査に着手するにあたり、「差出人に心当たりはないか」と尋ねた市山に、真由美は一人の女性社員の名前を挙げていた。茜(24歳)は勤続2年目の派遣社員で、仕事中にミスや遅刻が多いことから契約更新をせず、1カ月後に退職予定という。支社長の隆彦(51歳)は「絶対にセクハラをしていない」と強く否定していることもあり、「契約を更新されないことへの腹いせではないか」というのが真由美の見解だった。

2

調査を終えた市山が真由美を「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに呼んで報告した。オフィスでは男の格好をしているものの、市山の口調は相変わらずオネエ言葉だ。

「支社長には数年前、社内不倫のうわさがあったけれど、茜さんをはじめ、女性社員に対してセクハラ行為や侮辱的な誹謗中傷、支社長としての権力を行使して部下の勤務評定をおとしめるといった形跡はないようね」

「当然です。そんなことをしたら人事部長の私が抗議しますよ。女性社員が快適な環境で仕事できるようにするのも、私の重要な仕事の一つですから」

「1年前、あなたをいまのポストに抜擢したのは支社長。そもそもセクハラをするようなトップなら、厳格で評判のあなたを人事部長に起用するはずもないか。念のため付け加えると、支社長が女性社員と私的に交際している事実もなかったわ」

「つまり、男女関係のもつれから投書が送られたというわけでもないのですね。では投書の差出人はなぜ匿名で送ってきたのでしょうか」

首を傾げる真由美に、市山が言った。

「セクハラ事件で裁判に発展するのは氷山の一角。示談で処理されることが圧倒的に多いわ。そしてセクハラ事件の背後には、得てしてアドバイザーがいるものなの」

「アドバイザー？」

市山が1枚の写真を真由美の前に差し出した。写真にはどこか薄幸そうな色白、細面の美人が写っている。

「茜さんが最近、ファミレスで会っていた女性。この人に見覚えはないかしら？」

女性は2年前、支社長との不倫をうわさされ、退職した派遣社員の千鶴(35歳)だった。

3

職場のトラブルがきっかけでうつ病を患った夫が3カ月の休職期間を置いて、会社を追われた。退職金は出たものの、マイホームを建てたばかりで、食べ盛りの子どもが2人いる。夫の病気が完治するまで自分が家計を支えなければ、と決意したものの、30代のパート主婦の千鶴を正社員として雇ってくれる会社はなかった。

無料の求人誌で見た派遣会社に登録するとほどなく、とある金沢支社で事務職として働くことになった。勤務初日、支社長に「主人が失業して大変なんです。少しでも長く勤めさせて下さい」とあいさつすると、それからしばらくしてデートの誘いを受けるようになる。あからさまに断るのも角が立つので言葉を濁していると、支社長はさらにしつこく交際を迫ってきた。

思い余って定年間近の人事部長にこっそり相談してみたものの、答えは「そういうのを上手にかわすのも仕事のうち。誘われるのはあなた自身にも隙があるのでは」といういい加減なもので、派遣会社に泣きつくとも20代の担当者はクライアントである会社に気兼ねして「とにかく契約満了まで我慢して下さい」の一点張りだった。

そのうち支社長は「あなたの働きぶりいかんによってはいずれ正社員にしたい」と言い出した。それでなくとも「仕事の話がある」と誘われたら、むげには断れない。仕方なく何度か食事を付き合い、車で送ってもらううちに男女の関係となった。

オフィスで千鶴と支社長が不倫しているといううわさが流れたのは、それからほどなくのことである。郊外のレストランに千鶴を呼んだ隆彦から「派遣社員と不倫して便宜を与えたことが明らかになれば、降格ものだ。契約は打ち切るしかない。けれど私の気持ちは変わらない。あなたが退職しても、いままで通り交際を続けるよ」と告げられた。

「そんな……！ 私たちの関係は不倫なんかじゃありません。支社長から強制されて関係を持っただけ！ セクハラじゃないですか！」

千鶴が抗議すると、支社長が気色ばんだ。

「私はそんな卑劣な強制をした覚えはないぞ！ 亭主が失業中だというから、特別に目をかけてやっただけじゃないか。あなたの方こそ、イヤなら拒絶すればよかっただろう！ 大人の男女が合意の上でもった関係はセクハラなんかじゃない！」

それから何度か話し合いが重ねられ、結局、隆彦のポケットマネーから手切れ金名目で200万円を受け取って退職することになった。しかし社内では別れ話のゴタゴタのように受け止められただけで隆彦に対する処罰はなく、千鶴の腹立ちは収まらなかった。

そんなある日、久しぶりに連絡してきた後輩の茜が「契約を打ち切られちゃったんですよ。支社長はいつも嫌らしい視線であたしを見ているし、セクハラとして訴えちゃおうかな」と冗談まじりに相談を持ちかけてきたのだった。

4

市山は千鶴に連絡を取り、彼女の自宅近くのファミレスで会うことにした。最初、千鶴は断ったが、「例の件はこのままでは裁判になる」と市山が言うと、渋々やってきた。

「あなたが勤務していた会社に匿名の投書が届いているの。あたしはあなたが投書の黒幕だと知らんでいるのだけど」

市山が指摘すると、千鶴がそっけなくかぶりを振った。

「私には身に覚えのないことです」

「そう言うと思ったわ。それじゃあたしの独り言を聞いて」

「……」

「投書にあったセクハラをどれほど調査しても、その事実が出てこないの。投書の差出人が裁判を起こすつもりなら、会社としても出るところに出て戦うしかない。けど、もし裁判となれば、投書の差出人はきっと背後にいる人物の名前を出すと思うわ。あなたと支社長の不倫関係が明らかになるのよ。ご主人はそのことを知らないんでしょう？」

「あれは不倫なんかじゃない！ セクハラだったのよ！」

そう叫んだかと思うと、千鶴が両手で顔を覆い、嗚咽を漏らした。

「私は何もあの人をクビにしてほしい、と言ったわけでもないし、慰謝料を払ってほしいと要求したわけでもない。ただ、あの人がやったことをセクハラと認め、誠実に謝罪してほしいだけ。それなのに……」

千鶴が社内であった出来事を切れ切れに語り始めた。話を聞き終えた市山が口を開く。

「セクハラは仕事上の立場から、はっきりNOと言えないために起こることが多いわ。支社長もあなたが断りにくい状況を巧妙に作り出して肉体関係を迫ったのね」

うつむいた千鶴が唇を噛む。

「そのあげく、セクハラを男女関係のトラブルにすり変えられてしまった。だからこそ加害者である支社長にはセクハラをしたという自覚がないし、自分がなぜ非難されたのかも理解できなかったのでしょう。あなたとの一件の後、厳格な女性人事部長を登用しているのは何よりの証拠。

あなたの悔しさは分かるわ。だけどね」

市山が優しく、ピシャリと言った。

「後輩をダシにして復讐するのはお門違いよ」

5

茜は「支社長のセクハラを匂わせれば内々に退職金をもらえる」という千鶴の助言を真に受け、「もらえればラッキー」といった軽い気持ちで投書を出したものらしい。その後、茜は契約満了日を迎え、特にトラブルもなく退職した。

後日、市山と透が千鶴の様子を見に金沢市内にある自宅に赴くと、30坪ほどの敷地にこぢんまりとした白壁の家が建っており、玄関横のよく手入れされた小さな花壇が温かい家庭を想像させた。この日の市山は往年のハリウッド女優のようにスカーフを頭に巻き、ロングカーディガンの前を閉じてワンピース風に着こなして女装している。ファンデーションを厚塗りしたその顔は左官職人が仕上げた塗り壁のようになっていた。

「そんなに厚化粧したら、お肌が窒息しますよ、所長」

「だってあたし、口のまわりのうぶ毛が濃いんだもの」

「それはうぶ毛じゃなくて、ヒゲ！」

千鶴は不動産会社で派遣社員として勤務し、週末は引っ越しの梱包作業もしているらしい。正社員を目標に、家に帰ると家事と育児の合間を縫うように宅地建物取引士の資格取得に向けて勉強中だという。うつ病の夫はまだ長時間働くのは難しいようで週4日ほど、派遣スタッフとして短時間の倉庫内作業をしていた。

「夫婦は子どもの成長を楽しみにこつこつ働くタイプ。彼女にとって今回のことは魔がさしたとしか思えないわ。支社長との一件がよほど腹に据えかねたのでしょうかね」

「支社長は最後までセクハラを認めなかったようですね」

「セクハラには断固、その場で抗議すべきなのよ。さもないと相手は受け入れたとおめでたいカン違いをするからね」

「分かりました。オレもそう心掛けます」

「あたしも気をつけるわ。最近は女性上司から男性部下への`逆セクハラ、も増えてきたから」

「所長は男から男への`オネエセクハラ、に気をつけて下さい！」

その帰り道、2人は近ごろ透がよく通うという片町の「居酒屋まわり道」に立ち寄った。カウンターの中には透がひそかに思いを寄せている女子大生バイトのアヤカがいる。小一時間ほど飲んで食べ、会計を済ませた市山が「この店、おいしいのに安いよね」と感嘆の声を上げると、作務衣姿のアヤカが笑顔で答えた。

「今日はレディースデーなので、女性のお客さんは料金1割サービスなんです！」

「あたしにもサービスしてくれたの？」

「はい、もちろんです！」

「あんたって、なんてイイ子なの！ 大好きよ！」

感激した市山がアヤカを抱きしめ、その頬に強烈なキスマークをつけた。